

IV-18

「定期市」の実態調査に基づいた商店街活性化の可能性の検討

東北大学 正会員 ○星 啓
前橋工科大学 正会員 湯沢 昭
東北大学 学生員 齋藤 雅樹

1. はじめに

本調査研究では、古来より各地域で開催されてきた「定期市」を取り上げ、定期市の持つ魅力を活用した地方都市中心部の商店街活性化の可能性について検討することを目的とする。定期市利用者の買い物行動を調査することは、衰退が進む定期市の問題点を把握できる。また、定期市利用者を商店街へ回遊させることは、商店街への消費者を呼び戻すことにもなる。

本論文では、東北地方で開催している「定期市」を選定し、「定期市客と地域住民へのアンケート調査」などを基にした調査結果を報告する。

2. 定期市選定と調査方法などの概要

本研究で調査対象とする定期市の選定基準は、①毎月の市日を定め定期的に繰り返し開催されている「市」であること¹⁾。②各地域の定期市を巡回する市掛商人²⁾と衣料品出店が必ずあること³⁾。また、③定期市開催地域の買い物客比較の関係上、人口規模と「市」出店の開設形態²⁾が異なること。以上の基準条件などを満たす定期市を抽出した結果、花輪朝市(鹿角市)と市日(田子町)・市日(一戸町)の三カ所の定期市を選定した。調査実施の期間は、1999年10月と11月、定期市客へは直接アンケート調査票配布、出店者へはヒアリング調査を実施した。また地域住民への調査票配布は行政を通じ、鹿角市は中学校4校(1学年)、一戸町は小学校8校(3,4学年)の各世帯、田子町は9行政区連絡員を通じて配布し、郵送回収とした。配布数と回収率は表-1に示す通りである。

表-1 アンケート調査票の回収結果

	花輪朝市		田子町市日		一戸町市日	
配布対象	配布回収率(%)	配布回収率(%)	配布回収率(%)	配布回収率(%)	配布回収率(%)	配布回収率(%)
・地域住民	281	33.1	297	22.2	296	48.6
・定期市客	237	25.3	65	21.5	61	11.5
全体計	518	29.5	362	22.1	357	42.3

3. 調査結果

アンケート調査結果は、定期市客と地域住民に配布した調査票を、定期市の「利用者(276人)」と「非利用者(108人)」別に集計し、利用者主体別の分析結果を三地域別に示す。(図中の「利」は利用者、「非」は非利用者を表す)

(1)回答者の年代別

定期市利用者の年代別で、特に一戸町の30歳代が約43%と高い。この原因は、配布対象者が小学校3,4年の世帯と思われる。田子町と鹿角市は40歳代が約3割、4割で共に高く、高齢に進むに従って比率は減少傾向にある。非利用者も傾向は類似する(図-1)。

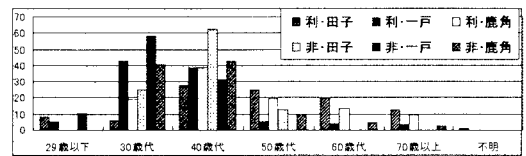


図-1 回答者の年代別構成 (%)

(2)定期市の開催日と施設整備

定期市開催日の「広報活動不足」要因が、定期市利用に影響を与えているのかを見ると、三地域とも定期市非利用者の約8割前後が「開催日」まで把握している。このことは、地域住民の「定期市」自体に対する認識が高く、「広報活動不足」による影響は特に見られないことを示している(図-2)。

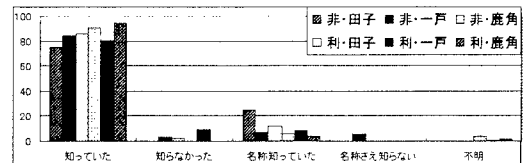


図-2 定期市開催日の認識構成 (%)

次に、「駐車場・トイレ・休憩所」設備の有無が買い物行動に影響を与えるのかを見ると、施設整備無の時でも購入する割合は、田子町で約58%、一戸町で約54%、鹿角市で約46%である。田子町と一戸町では「施設整備されたら購入する」の割合が共に約3割を占めることは、施設整備によって利用回数頻度が増加する可能性を示唆する。逆に、施設が充実している鹿角市では、「施設が無くなったら定期市で買わない」という意識を持つ人の割合は約34%を占める。非利用者で見ると、「施設整備されると買う」という意識を持つ人の割合が、田子町と一戸町でともに約25%あることは、施設整備による潜在需要の増加分と考えられる(図-3)。以上から、施設整備の

有無は、定期市の利用者数と利用回数の増減に影響することを示唆する。

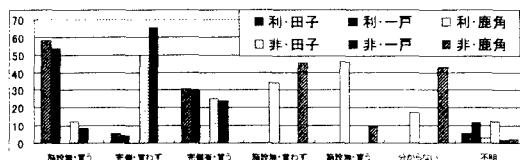


図-3 施設整備有無の意識変化構成 (%)

(3) 定期市利用後の買い物行動

定期市出店で買い物をした後、帰宅の途中に商店街や大型店舗で買い物をする、いわゆる回遊行動の割合は、田子町は約 82 %、一戸町は約 73 %、鹿角市は約 77 % の高い割合で買い物行動をしている(図-4)。次に、定期市利用者を帰宅途中での回遊の有無別と利用交通機関別で見ると、回遊有者は「自分の自動車」が約 56 %、回遊無者は「徒歩」が約 37 % と特に高いことは、定期市出店位置と購入店舗間の距離が影響していると思われる(図-6)。

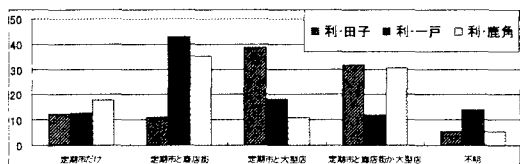


図-4 帰宅途中での回遊性構成 (%)

(4) 定期市までの交通機関・距離と滞留時間

利用者を「定期市」開設域内までの利用交通機関で見ると、三地域とも買い物時の利用交通機関は、約 39 ~ 53 % が自分の自動車利用である。相乗も含めると自動車利用は約 44 ~ 65 % を占める。徒歩での定期市利用者は三地域とも約 2 割ほどいる(図-5)。

次に自宅から定期市までの距離を見ると、田子町は 2 ~ 4km 未満が約 25 %、8km 以上の遠距離利用者は約 29 % もいる。一戸町や鹿角市は 2km 未満の近距離利用者が約 4 割強を占める。一般的に田子町は遠距離利用者が多く、一戸町や鹿角市は近距離者が多い。定期市利用者を回遊の有無別と距離別で見ると、回遊有者は 2 ~ 4km 未満の範囲が比率で回遊無者の約 4 倍、逆に、回遊無者は 500m 未満の範囲が比率で回遊有者の約 4 倍を示している(図-6)。

さらに、「定期市」開設域内での定期市利用者の滞留時間を見ると、三地域とも 15 ~ 30 分未満範囲の割合が約 3 割を占める。これも含めて、30 分未満の滞留時間が約 5 割近くを占めることは、「購入品目を事前に決めている」「複数の店舗では購入はしてない」状況が伺える。これらの要因の一つとして、路上駐

車の為に短時間内で買い物を済ます必要がある為と考えられる。帰宅途中による回遊者の有無別で見ても、滞留時間別の比率傾向は類似している。(図-7)

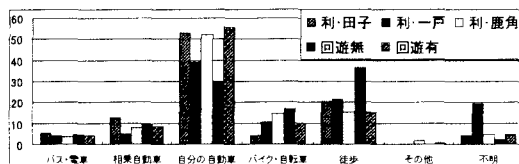


図-5 定期市までの利用交通機関構成 (%)

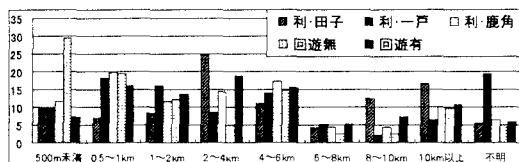


図-6 自宅から定期市までの距離構成 (%)

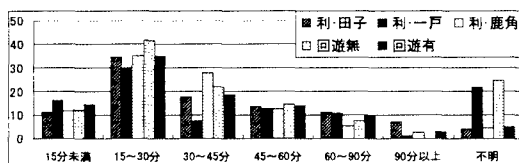


図-7 定期市での滞留時間構成 (%)

4. 結論と課題

本調査研究により、以下のことが明らかになった。

- ①全回答者の年代別では、40 歳代の比率が最も高い。
- ②定期市開催日は、利用者が約 9 割、非利用者でも約 8 割が知っている。
- ③施設整備の有無は定期市利用者の増減に影響している。
- ④定期市利用者が帰宅途中に買い物をする割合は、約 7 割以上の高比率である。回遊有者は自動車利用が多く、回遊無者は徒歩が多い。
- ⑤定期市利用者の約 6 割近くが自動車利用である。
- ⑥田子町は遠距離客、一戸町・鹿角市は近距離客が多い。
- ⑦「定期市」開設域内での買い物滞留時間は、30 分未満が約 5 割を占める。

④の現状結果と③の改善を行うことにより、消費者を中心商店街に呼び戻す可能性は高いと思われる。

しかし、定期市出店の開設形態と業種、商店街との協力体制、定期市開催日以外での買い物客の定着をいかにして図るか、これらの課題が今後に残る。

本研究は平成 11 年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(B))を受けて実施された研究の一部である。

【主要参考文献】

- 1) 中島・川手・原・森川(1991):「伝統市と地域社会農業」
一宮城県古川市の八百屋市・日曜朝市の事例—日本の農業 179
- 2) 青森県商工会連合会広域指導センター三戸支所(1997):「商人の道」
青森県南・岩手県北地方定期市実態調査報告書
- 3) 岡村 治(1989):「新潟県における定期市場網の地域的差異」
—市街行動の分析を通して—第 41 巻第 3 号 人文地理